地域民間芸能の観光資源化と地域振興

－阿波踊りの事例から－

佐　藤　正　志

Regional People's Entertainment Tourism Resources and Regional Promotion

－ From the Case of Awa Dance －

Masashi SATO

２０１９．２

「経営情報研究」Vol. 26, No. 1, 2 別刷
摂南大学経営学部

経営情報研究
第 26 巻第 1・2 号（2019 年 2 月）, 109 － 130 ページ

研究ノート

地域民間芸能の観光資源化と地域振興
－阿波踊りの事例から－

佐藤　正志

Regional People's Entertainment Tourism Resources and Regional Promotion
－ From the Case of Awa Dance －

Masashi SATO

【要約】徳島の阿波踊りは、歴史的には江戸期から明治末まで隆盛を誇った阿波藍業をベースとした地域の経済力が存立基盤となり、民衆が育くんできた盆踊りをルーツとする。明治末における藍業衰退を契機とした地域経済の停滞を打破するために、大正末から昭和初期に商工会議所が主導して、地域振興策として盆踊りの観光資源化が推進された。

もともと阿波踊りは、その踊りの様式や囃子が柔軟で創意性に富んでおり、常に変化し新しいスタイルを生み出すものである。そのため、観光資源化の過程において宗教性と土着性を希薄化させると、あらゆる地域で受け入れ可能な「踊り」へと変容していった。1970 年代に関東を中心に各都市において、商店街の活性化や地域振興策の一環として導入されて定着すると、それらの街の人々の踊りとなり定着していった。

徳島の地域振興策として遂行された阿波踊りの観光資源化は、結局その歴史的な成立・存立基盤である地域・徳島から、阿波踊りが「地域」性を喪失させながら全国へと伝播する道筋を準備したという視点でとらえることができるのである。

はじめに

徳島は盆踊り（阿波踊り）や人形浄瑠璃をはじめとする民間（民衆）芸能が盛んな「芸どころ」といわれてきた。そうした地域の民間芸能を隆盛させた社会的経済的な背景として、近世から明治30年代にかけての藍業の隆盛を指摘することができる。江戸・大坂市場などに進出した藍商たちは、そこで歌舞伎や浄瑠璃、文楽などに接し、それらの多様な芸能文化を徳島城下に持ち込んだと考えられる。城下で従来から行われていた盆踊りは、藍商や肥料商らが持ち込んだ諸芸農を受容・吸収しながら、阿波踊りへと変化し、成長を遂げていったのである。

本稿では、徳島の民間芸能の成立基盤としての阿波藍業の展開過程を一瞥し、近世から現代に至る阿波徳島の民間芸能を代表する阿波踊りについて、その発展過程を概観する。そのなかで、とくに大正末から昭和初期にはじまる阿波踊りの観光資源化の背景と、それが地域社会・経済に何をもたらせたのか、という点に焦点を当てて考察する。

阿波踊りの観光資源（事業）化に関する研究

阿波踊りの歴史的な発展、変化に関する研究についてみると、まず地域（郷土）史研究において多くの蓄積がある。なかでも、近世における盆踊りをはじめとする民間芸能と藍商および藩権力との関係を明らかにした三好昭一郎の研究蓄積が大きい。また盆踊りから阿波踊りへの変容・発展については、同じ三好（2006）、高橋啓（2007）の研究がある。両者の間には、見解の相違があるが、紙数の関係上、検討は別の機会とする。

本稿が対象とする阿波踊りの観光資源（事業）化については、関口寛（2007）、三室清子（1967）、小林勝法（2005）などの研究成果がある。なかでも関口は、観光化の歴史的背景とともに、観光化が「伝統的な盆踊りが持つ猥雑さや無秩序な民衆のエネルギーを整序」させる役割を担ったと指摘しており、本稿も多くを学んでいる。また、中野紀和（2010）は、戦後の観光化の進展のなかで整備されてきた演舞場（桟敷）の存在に注目し、踊る場の固定化によって「我れを忘れて身体全体で楽しんできた」踊りが「見せる踊り」になることで、「観客の視線をコントロールし、視覚重視の観光資源」になったと指摘する。また、それを担った「有名連」はその他の連（踊りのグループ）に対して「優位性」を有し、連と連との関係性にはヒエラルキーが存在すると分析するなど、これまで阿波踊りの研究では十分触れられなかった点を解明している。

ところで、各地の阿波踊りを社会学的な視点から分析した松平誠の一連の研究（1990、1996、2008）がある。阿波踊りは後述のように関東の都市に「伝播」するが、松平は各地で「都市祝祭」を担い、本場・徳島を凌駕するような賑わいをみせている要因を阿波踊りの本質から明らかにする。本稿は松平の社会学視点から分析した研究成果にも学び、徳島の阿波踊りの観光資源化の背景とその過程、さらに他地域への「伝播」について考察する。

その際、徳島の地域振興のために出発した阿波踊りの観光事業化は、その過程で宗教性と土着性が希薄化されていき、どの地域でも受け入れ可能なイベント・「踊り」へと変容していった。その結果、阿波踊りは歴史的な成立・存立基盤である徳島という「地域」性を喪失させる

ことによって、全国へ伝播する道筋を準備したという独自の視点でとらえ直すことが本稿の目的である。

1. 地域民間芸能の存立基盤としての藍業

1.1　阿波藍業の発展と藍商

まず、徳島における民間芸能の経済的な存立基盤となっていた阿波藍の発展を一瞥し、そうしたなかで藍業、藍商と民間芸能がどのように関連していたのかについてみておこう[(1)]。

吉野川中下流域は阿波の「北方（きたがた）」と呼ばれ、そこに位置する名東・名西（みょうざい）・板野（いたの）・阿波・麻植（おえ）5郡では、同川の氾濫による肥沃な客土が藍の連作を可能とし、藍作の中核地帯を形成した。摂津国兵庫北関の入船・関銭賦課記録である「兵庫北関入船納帳」には、阿波からの藍の移送についての記載があり、すでに中世には一定量の藍栽培が行われていたと推測できる[(2)]。18世紀に至り、畿内での木綿生産の伸張を受けて藍栽培は急速に拡大し、商品作物として成長した。藍の作付面積は、1740年（元文5）に吉野川上流の美馬（みま）・三好両郡を含み約3,000町歩であり、1800年（寛政12）には6,500町歩に拡大し、1837年（天保8）には7,133町歩（藍玉産移出量23万俵）となり、天保期（1830-44）に藩政期のピークを迎えた。

藍栽培は多量の肥料を投入する多肥農業であった。高品質によって市場支配力を維持するために他国から移入した干鰯や鰊粕等の金肥を多量に投下することが不可欠となっており、そのため「金喰い農業」とも呼ばれた。また、藍の栽培過程をみると、節分の時期の播種に始まり、施肥や除草、揚水や灌水作業、藍葉の収穫など厳しい労働の連続であった。重労働の辛さは、農民たちによって、「阿波の北方起きあがり小坊師、寝たと思たらはや起きた」などと唄われた。また、このように藍作が多肥多労を特質とする商業農業として展開するなかで、農民層の分解が引き起こされ、藍作農民の窮乏化を招いたのである[(3)]。

1.2　藩の藍統制と藍商

葉藍を寝かせて発酵させて、すくもを製造する「寝床」（ねどこ）を持ち、藍玉生産に従事した藍師（玉師）は、肥料の前貸しによって藍作農民を支配した。生産規模が大きい大藍師は、他国に特権的な売場株を持ち藍玉販売を行う商人でもあった。18世紀の阿波藍業の発展を契機に、藩は財政の再建を目的に、1733年（享保18）に藍方役所を設置し、藍の統制と徴税強化に乗り出した。1754年（宝暦4）には旧来からの藍師に製藍特権である藍師株を与え、運上金を徴収する新仕法を創設したが中小藍師層の切り捨て策であったため、名西郡高原村一帯の農民が藍師株撤廃を要求する一揆を計画、一揆は未然に阻止されたが、この動きは藍作のみならず藍玉の流通過程に参加をめざす小藍師や藍作人の成長を背景としていたため、新仕法は撤回され、藩の藍統制は後退した。

そうしたなか、藍師数は天保期（1830-43年）には1,800人を数えた。そのうち7割前後が大

坂売りで、大坂商人に金融的に従属した。そこで、藩は1766年（明和3）に藍方役場（翌年、藍方代官所と改称）を設け、藍の流通と生産を統制し、大坂商人から藍相場の主導権の奪還をめざした。また、大坂に準じて藍の大市を開催し、陰暦8月16日に「初市」、11月9日～16日には「藍大市」を開催し、品位の選択と値建を行い、新年度の相場基準を決めた。売買には江戸売仲間、大坂愛染講仲間、徳島四軒問屋などが参加してにぎわいを見せた。その後、藩は享和～天保期（19世紀前半）に全国に31の売場株を設定し、阿波藍商の独占的な市場支配をめざした。

こうした藍業、藍商の繁栄に伴い、阿波では人形浄瑠璃や三味線など芸事が興隆した。阿波・淡路の人形浄瑠璃集団の社会的存立構造を分析した神田由築によれば、阿淡では地域社会に密着した浄瑠璃集団が活動しており、それらは大坂の浄瑠璃集団との間に対抗関係を有しつつも、個々の芸能者レベルでは交流があり、また阿淡は芸能者の「供給地」ともなっていた(4)。神田は、名西郡の藍作豪農元木宇三郎が書き残した『かどや（加登屋）日記』を分析し、阿波の地における人形浄瑠璃座の興行状況から、幕末には三都の芝居以外に地方を拠点とする「芸能商品」が多元的な「流通」構造を成立させ、「高いレベルの『商品』が三都に集中せずに、地方でも消費」されていたことを明らかにしている(5)。

また、神田は興行の存立を支える社会集団のひとつである「素人」＝旦那衆の存在と彼らの金銭的、精神的支援に注目しているが、阿波徳島の場合、この「素人」＝旦那衆は藍商、肥料商など富商たちであった。とくに藍商は、「浄瑠璃の師匠を住み込ませて義太夫の稽古をする」風習を持っており、自ら「玄人はだし」で「素人義太夫（浄瑠璃）」を演じ楽しんでいた(6)。また彼らは、淡路や大坂からプロの芸能者集団を呼び込み興行させるプロモーターとしての役割を果たすなど、地域芸能文化の発展において、重要な役割・機能を担った。

なお、三好昭一郎はこのような藍商や肥料商が接待や遊興の場として利用した「色街」とそこでの芸舞妓の役割に注目する。商人たちは顧客接待を通して江戸・大坂において歌舞伎を始め諸芸能・文化と接触すると、それらを阿波に持ち込み、色街で自演あるいは芸妓・舞妓に演じさせて楽しみ、その過程でアレンジ・変容されて市中に伝播していった、とされる。明治以降も藍を買い付けに来た大阪や東京の取引先の客を藍商人が接待するなかで、客は芸妓たち

表1．各種芸能者数（徳島県）

遊芸師匠

	三味線	琴	尺八	薩摩琵琶	筑前琵琶	踊り
男	12	3	8	4	2	0
女	38	5	1	5	1	4

遊芸稼人

	義太夫	落語	浪花節	源氏節	法界節	その他	計
男	51	0	25	1	5	97	179
女	9	1	2	0	9	25	46

芸舞妓数

11歳未満	12～17歳	18～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40歳～	計
2	213	177	121	67	49	15	14	658

（出所）『徳島毎日新聞』1923年8月12日、徳島県調査

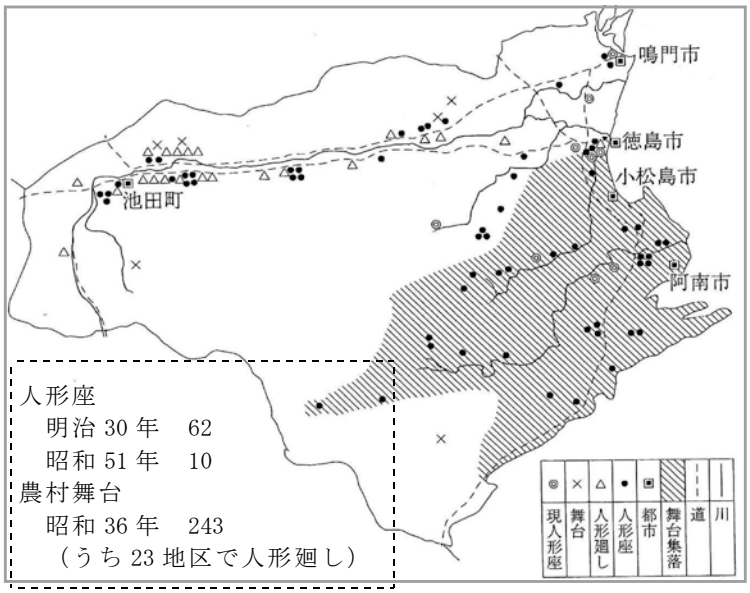
に阿波踊りの手ほどきを受け、身振り手振りで踊り出した。藍商の接待や宴会の場となり、表1のように大正期には650人を超す芸舞妓らを擁した「色街」という空間･場が地域芸能の「揺籃器」となっていた[7]。

藍業の隆盛がみられた幕末から明治中期に、前述のように吉野川流域の藍作中核地帯では藍商が淡路からプロの人形座を呼び込み興行が行われており、また、大きな人口を抱え、藍商らの活動によって経済力が集中した徳島城下では、人形浄瑠璃のみならず軽業などの見世物、大相撲、講釈、講談などの諸芸能の興行の中心地を形成した。前出『かどや日記』は、吉野川流域の農村部をはじめ徳島城下周辺部・眉山山麓の寺社境内などで興行が頻繁に行われ、まさに地方都市において諸芸能の「商品化」とその消費が行われていた様子を描写している[8]。

ところで江戸中期以降、阿波徳島は人形の頭（かしら）の有数の供給地でもあった。「阿波人形師の祖」と呼ばれる駒蔵や天狗久、人形富をはじめ技能の高い人形師が作る頭は阿淡の人形座に供給された。人形座は全国の巡業地で興行する傍ら、座の経営維持を図るため人形を売却している。さらに各地の人形座の結成や運営に寄与することによって、阿波の木偶（でこ）文化を伝播する機能を果たした[9]。

このように、徳島では藍業による商品経済の発展を基盤として富を握った商人層が民間芸能の発展を主導したが、非藍作地帯であった徳島県南部の那賀、勝浦、海部郡など農山間部では、多くの神社境内に「農村舞台」が設置され、農民自らが結成した人形座が浄瑠璃を自演し、奉納していた。このように、同じ人形芝居であっても、藍作地域や城下町徳島のように興行という形態で芸能が商品化して展開した地域と、上述のように農山間部のように独自の民間芸能として発展をみせた地域があった[10]（図1参照）。そうした点からみると、商品貨幣経済の発展･

図1．農村舞台と人形座の分布



（出所）檜瑛司（2004）805頁

展開した地理的空間と民間芸能が発展・展開した空間とは必ずしも一致しなかった点にも注意が必要である[11]。

1.3　明治期の藍業の盛衰と地域民間芸能

阿波藍は明治に入ると藩権力による統制から開放され、藍師が急増し、粗製濫造によってその声価を失墜した。しかし、明治10年代には綿織物などの繊維産業の急成長を背景に染料需要が増大し、藍業は再び発展の軌道に乗る。明治20年代末にかけて徳島県内の藍作付面積は伸長し、1903（明治36）年に1万5千町歩のピークに達した。このような藍業の経済力を背景にして、1889年の市制施行時、徳島市の人口は全国第10位の6万人余りを擁し、地方屈指の「大都市」となっていた。

ところが、明治20年代末にはインド藍の流入が急拡大し、その対策が模索された。五代友厚が設けた朝陽館はインド藍製法を採用して製藍事業に乗り出しており、徳島県や阿波藍製造販売同業組合も1900年に精藍伝習所を設立し、製藍法や肥料の改良に取り組んだ。しかし、製藍改良は見るべき成果は出せず、藍業不振が続くなかで、藍作農民の北海道移住が推進されるなどした[12]。

さらに、明治30年代における「人造藍」（化学染料）の輸入拡大は、藍作・藍業に決定的な打撃を与え、藍は商品作物としての歴史的役割を終えた。こうした藍作・藍業の衰退への対応策として、明治末に藍作地帯では稲作への転換をめざし大規模な用水工事が行われ、畑地では桑作や蔬菜栽培が始まるなど農業構造は大きく転換した。また、藍商らは蓄積資本を銀行業や電力、鉄道、海運などの交通業をはじめとする地域の近代産業に投資し、その近代化に寄与する一方、土地投資にも力を入れ始めた。しかし、明治末期の藍業衰退は、地域経済を大きく後退させ、盆踊りをはじめ地域の民間芸能の停滞を引き起こしたのである[13]。

2.「阿波踊り」の展開と観光事業化

2.1　明治期の盆踊り

人形浄瑠璃とともに阿波徳島を代表する民間芸能の阿波踊りは、三好（2006）によると、その原初形態は近世期に徳島城下で盂蘭盆に行われていた盆踊りの「ぞめき踊り」が変容したものである。盆の3日間には、俄（にわか）や組踊りなどが行われ、それらの歌舞伎風の「遊芸的」要素（芸態や衣裳）を「ぞめき踊り」が受容しつつ、絶えず変化しながら現在の阿波踊りへと変容、成長していった[14]。

ところで、明治期の盆踊りの様子は今日のものとは大きく異なっていた。旧盆の3日間は「朝より喉自慢、三味線自慢の人々、洒落たる扮装（いでたち）にて市内を流し行き」、彼らの衣装は「女は縮緬の長襦袢に縮緬の浴衣を着て、豪奢を競ふなぞ、到底他にては見る」ことのない「藍商全盛時代の遺風」があったと回顧されている[15]。

この「市内を流し行」く「流し」は「朝つゆの匂いがする涼しい間」に「お師匠さんが三

味線の弟子一隊をひきつれて街を流して通る。娘をつれた母親も昔の技をみせる」者もいて、「徳島の女の子は大正時代までも三味線のひけぬものはまあなかった」という芸事の盛んな地域の一般女性たちが主役となり、日常的に磨いた芸を披露したのである。そうした「流し」には独特の「風情」が醸し出されていたが、明治中期以降、近代的な女子教育が普及はじめると、親が子供を踊りに参加させない風潮も生まれてきたようだ。また、各町内でできた「おどりの連」には、「中にかつぎ屋台のようなものをとりまいて踊り、その屋台の上でにわかや、曲芸や歌舞音曲を演じた。連はこの担屋台の演出を町ぐるみで競うた。そのために借金ができて夜逃げしたなんて記録もある。そんなのを江戸趣味ともいい、町人気質ともいう」と書き残されており、藩政期から盛んだった俄や組踊り、歌舞伎風の諸芸が明治期にも引き継がれており、街中で披露されていた[16]。

その後、「午後三、四時頃より夜に入りては、大部隊の出動して、処きらはず踊り行く」「他の地方の環を作りて踊るものとは全く異な」った「行進型」の乱舞がみられた[17]。

夜になっての「盆踊り」は、賑やかで、民衆のエネルギーが横溢した乱舞が見られた。しかし、徳島県当局などはそこに内在した「野卑」で「無秩序」な雰囲気や性的な風俗などが「風紀紊乱」をもたらし、明治国家が推進する「文明開化」路線とは相容れないものと捉え、規制の対象としたのである。1868 ～ 1870 年の 3 か年に県から発布された「取締令」は、藩政期の取締まりを彷彿とさせるものであった[18]。また、この権力的な規制に呼応するように、地元新聞は次のように「盆踊り」に対して厳しい批判をおこなっていた。

「自治体と盆踊

・・本県に於ても名物の一として阿波の気狂踊の名高し殊に文化の中心たる徳島市に於て最も盛にして他府県より態々其状況を見むが為来県するものあるの一事に徴するも本県の気狂踊りが如何に近府県に鳴れるかを推知するに足る・・・教育眼を以て直に批評するは早計に失する事あるも如上の気狂踊りの如きに至りては之を保持すべき価値毫も認むる所なしや・・・弊害の認むるものあらば独り盆踊りに止まらず其他之に類するものは大に打破の策を講じ代ふるに精神的娯楽を與へ風紀を振作し自治体の健全なる発達を促し国家の富強を図らむ事最も必要の事なり云々と（地方課当局の談）」[19]

なお、民間芸能に対する公権力の規制は、盆踊りに止まらず、江戸期において前述のように藩が「公許」してきた人形浄瑠璃に対しても行われた。1913 年に県知事を会長とする徳島県教育会が発表した『義太夫調査書』において、浄瑠璃の語りの内容を秩序維持や公序良俗の観点から精査して 4 種類に分類し、推奨すべき演題をあげている。「思想善導」の観点から浄瑠璃演題の選別と利用が行われたのである[20]。

2.2　地域経済の動揺と踊りの変化

ところで、徳島の盆踊りは、第 1 次世界大戦中におきた青島陥落（1914 年）や大正天皇即位（1915年）さらに徳島市制30周年（1918年）など盆以外の時期に行われた祝賀奉祝行事において、たびたび催行されている。こうしたことが契機となって、明治後期に藍経済の後退によって下

火となっていた盆踊りが、大正期に入ると様々な変化を伴いながら盛り上がりをみせ始めたのである。

まず、踊りにおける変化で注目されるのが、朝から昼間にかけて行われた「流し」において主役を演じた一般の婦女子らが姿を消し、花柳界の芸舞妓らに主役を交替したことである。芸舞妓らが演じる華やかな「見せる踊り」が前面に出てきたのである。芸舞妓が被った編み笠や手に持った団扇には商品名が付けられた。また、石鹸、化粧品メーカーが 100 人規模の大部隊を繰り出し、多数の「観客」の存在を前提に、踊りを広告宣伝の媒体として利用しようとする動きも始まっていた[21]。個人商店やカフェ、中小町工場などの職場を単位にした踊りのグループが結成され、職工たちの親睦と審査場での景品獲得を兼ねて、統制のとれた「団体踊り」を披露する例も目立ち、「見せる踊り」を盛り上げた[22]。

また、鳴り物にも変化が現れた。従来の三味線、鼓に加えて、バイオリンやマンドリン、クラリネット、ハーモニカなど当時流行していた西洋楽器が使われ始めた（表 2 参照）。そうしたなかで踊り子や見物人の数が漸増しはじめ、盆踊りは盛り上がりをみせはじめたのである。

このように盆踊りが、観客への「見せる踊り」、観客にとっては「見る踊り」へと変容する過程で、盆踊りが本来的に持っていた宗教的・伝統的・土着的な要素が漸次希薄化しはじめた。そのため、地元新聞は従来の「阿波の（盂蘭）盆踊り」という呼び方に加えて、「阿波踊り」「徳島踊り」といった呼称を使い始めた。同時に、その報道姿勢も明治期と違って好意的なものへと変化していった[23]。

表 2. 阿波踊りにおける変化・流行

時期	衣装	鳴り物
近世		胡弓、つつみ、四つ竹、拍子木、月琴、三味線
明治期		琵琶、太鼓、小太鼓、石油缶、尺八
大正期	芸舞妓の衣装：長襦袢→揃いの浴衣	洋楽器の登場（バイオリン、マンドリン、ハーモニカ、クラリネット、アコーディオン、トライアングル）、木魚
昭和・戦前期	紅白のダンダラぱっち、法被姿、長襦袢に編み笠の鳥追い姿の復活	打楽器の主導（大太鼓、鉦、バラライカ、タンバリン）ビールの空き瓶、金だらい
戦後		笛（みさと笛）

（出所）松本進「阿波踊りの歴史」『徳島の研究』7, 清文堂出版 ,1982 年
飯田義資『阿波踊り』徳島県教育会出版部 ,1964 年

しかしながら、再び大正末から地域経済の景気が後退し、さらに疫病流行によって追い打ちがかけられると、踊りの熱気は急速に冷めた。そうした停滞状況を県外客の勧誘によって打破しようと、大正末から徳島商工会議所や地元新聞社が主導して、県外への盆踊りの宣伝活動に乗り出した。1916 年には和歌山県商工会議所の要請で紀三井寺千日参りに踊り子が派遣され 3 日間踊った。初の県外遠征であった。1921 年 3 月には 神戸開港 50 周年祝賀行事に芸妓 20 人が招待され、神戸市内で踊って観光宣伝をした。また、同年 5 月には同じく芸妓 10 人が東京、大阪、神戸で 10 日ずつ公演した。阿波踊りの宣伝活動の主役として芸舞妓が積極的に

使われている[24]。

ところで、全国的な金融恐慌に先立つ1927年2月に藍商の大串龍太郎らが創設した徳島銀行と徳島貯蓄銀行が放漫経営によって行き詰まり、休業に陥った。その破綻は預金者をはじめ公金取扱指定銀行としていた県や各市町村などの行政機関に打撃を与え、県経済界を揺るがした。さらに、同年に徳島市の地場産業の中核をなしていた鏡台、下駄製造などの木工業にも不況の波が及び、工賃切下げに反対する職工らが労働組合を結成し、ストを打つなど労働争議が頻発した。その後、昭和初めにかけて県内では塩田争議（撫養、現鳴門市）や小作争議が頻発した。とくに小作争議は全国有数の争議数を記録するなど地域社会の基盤を揺るがせた[25]。

また、当該期には三越の出張販売がたびたび行われており、「県外の大資本による百貨店進出」は市内商店主らにとっては死活問題となっていた。商工会議所は県外百貨店進出の阻止対策に取り組んでいたが、さまざまな地域経済の危機的状況が押し寄せる状況を前に、1928年8月に同会議所内から「多年沈衰した徳島市の産業界に活気を盛返すのは盆踊の外にはないウンと飲んでウンと踊つて景気をつけようぢやないか」との意見が出て、盆踊りを「大いに奨励」することになった。この年から1936年まで、同会議所は警察から盆踊りの催行許可を貰う「願い主」を担い、盆踊りの実質的な主催者となった。ポスターを数千枚印刷して全市に配布する一方、「盆踊りの時間は毎日午前8時から午後11時まで、盆踊は元々卑しい踊りではないので狂態を演じてはならない、男の女装、女の男装、異様の服装、裸体、風俗を乱す行為は禁止」といった注意事項も市民に周知している[26]。

さらに、翌1929年8月には、「大いに宣伝して県外の観客を多数吸収し、市の財界景気振興策をはかると同時に一面郷土芸術を一層普及徹底せしめよう」との目標を立て、「種々の方法を考究」していた会議所は、踊り開催日を前にして、徳島市をはじめ鉄道・船会社、料理業組合、検番、マスコミ、警察などの関係者を招集し、盆踊り振興策を協議した。その結果、「踊り子奨励方法」として市内2カ所に賞品授与所を設置し審査の上で賞品を授与することや多数の休憩所を設置することを決めた。とくに県外観光客の誘引策に力を入れ、ポスター2千枚、パンフレット2万枚、宣伝ビラ3万枚を印刷し、県内はもちろん「近畿、中国、四国方面各県に貼り出」すことを決定した。また、「鉄道、汽船運賃の割引、旅館の勉強等」を要請し、各家庭も盆提灯や装飾灯で飾り、「民家の店先、二階等を出来るだけ開放して観客の便宜をはかる」ように要望することになった。さらに「中央放送局へ委嘱して踊り当日の五日前位に盆踊に関する放送を依頼する等あらゆる宣伝を尽」くすことを決めている[27]。

2.3 「徳島観光協会」の設立と阿波踊りの観光化

上述のように阿波踊りへ県外客誘致のための活動や協議を積み重ねてきた徳島商工会議所は、1932年6月25日に徳島観光協会を創設するに至る。同協会は下の【史料】のごとく、商工会議所をはじめ船会社や飲食・旅館組合、芸妓らを管理する検番など観光関連団体を糾合し、会長に会議所会頭、副会長には市助役が充て、実務を徳島市と商工会議所の職員が担う体制が構築された。創立総会には約20名の各団体代表が参加し、光慶図書館（徳島県立図書館の前身）館長が他府県の観光事業の事例について講演を行った[28]。

【史料】徳島商工会議所編『昭和七年度事業成績報告書』
（同会議所、1933年、10 -11頁）

昭和7年6月25日 徳島観光協会創立総会ヲ開催　役員左ノ如シ

会長　徳島商工会議所会頭　玉田弥伊太

一、副会長　徳島市助役　藤岡直兵衛

二、評議員　料理組合佐藤善一郎、料理組合橋本鶴吉、旅館組合徳永強、
同和田貞太郎、共同汽船葭本甚三郎、同天羽壽郎
繁栄組浜口松市、桜屋バス炭谷松三、富田町検番佐藤善一郎、内町検番美増芳太郎、遊郭検番富宅健次郎

三、幹事　槇納市庶務課長、鍛川市勧業課主任、井筒会議所理事

四、書記　市役所遠藤、加古、近藤書記　会議所藤本、佐藤、森川、浅川書記

このような商工会議所の観光事業への積極的な肩入れに対して、会議所内部には「会議所はただ徒らに金を費やして無駄遊びをする、もっと身の入った金の儲かる仕事をせよ」との批判が一部には存在したが(29)、徳島観光協会の設立を機に、盆踊りの観光事業化は本格的に始動したのである。踊り本番を前にした同年7月、観光協会は第1回評議員会を開催し、「盆踊の宣伝を十分に行い、併せて従来の如き伝統的の阿波踊風俗を乱す卑俗な踊りは一切厳禁するやう」に申し合せている(30)。また、阿波踊り期間中の「県外客接待のため」に徳島駅前など3か所に休憩所を設け、審査場に「サービスガール数十名」を採用し「県外客に満足を興へる」計画を立てた(31)。こうして迎えた阿波踊り本番は、8月14日から4日間催行され、同協会の運動が功を奏し、「昨年まで見られたジヤズ附の盆踊は姿をひそめその見るものは古典的な調子の豊かな踊があるのみ」(32)となった。

翌1933年には、阿波国共同汽船が臨時の「阿波踊見物船」を出し、阪神からの観光客に対して「便宜」をはかった。観光協会は市役所前の広場に「審査会場」を設け、優秀な踊り子・連を表彰するため2千本の小型優勝旗と200本の大型優勝旗を準備し、授与した(33)。「見せる踊り」をする踊り子たちを発奮させる手立てであった。各検番の芸妓300名余りも動員され、「県外への宣伝も素晴らしく徹底」したため県外から4千名以上の見物客を集めた。四百数十組の「踊りの群は繁華街に洪水の如く繰込み踊る阿呆に見る阿呆で大雑踏と呈」したのである(34)。

2.4　観光資源化の推進要因

このように大正末から盆踊り＝阿波踊りの観光資源化が推進されたが、その直接的な契機は、前述のように不況対策であった。しかし、当面の景気対策のみならず、明治末期からの藍業の衰退に対応し、代替産業を模索してきた動きと重複するものであった。

さらに、全国的な視点からみれば、おりからの「旅行熱」（ブーム）の影響を強く受けていた。すでに、日本は1920年代の経済不況を突破する政策の一つとして、国際観光収入に大きな期待をかけ、1930年には国際観光局とその外郭団体である国際観光協会が創設され、外客誘致と国際宣伝の役割を担うことになった(35)。

もちろん、この時期の観光化の動きは、外客誘致にとどまらず、鉄道など交通網の整備が

進捗するのに伴い、国民の間でも「旅行熱」が拡がっていた。それを受けて、全国各地で名所・旧蹟をはじめ地域の伝統行事や民間芸能、景観等が「観光資源」として掘り起こされ、新たなイメージの創出や転換が図られつつあった。

明治中期まで、「阿波の盆踊り」は県内外で刊行された名所案内書や旅行案内書にはほとんど取り上げられなかったが、大正期に入ると漸次紹介するものが出現しはじめた。「盆踊り」が重要な伝統的な芸能として「発見」「認知」され、情報発信がはじまったのである[36]。

明治末期から昭和初期における徳島県内の交通発展を一瞥すると、まず阪神からの連絡港であった小松島と徳島市を結ぶ阿波国共同鉄道や撫養（鳴門）と徳島間を繋いだ阿波電気軌道が開業した。国有化された徳島鉄道は1914年に阿波池田まで延伸された。徳島・高松間を結ぶ高徳線の全線開通は1935年であった。このような鉄道網の拡大とともに、中小零細のバス会社が県内各地で叢生し、バス路線網が拡充するなど陸上交通において飛躍的な発展があった。海上交通では、大阪と徳島を結ぶ阿摂航路において、大阪商船と系列の摂陽商船によって直行船が就航している。このように当該期に交通網＝インフラの整備が一挙に進捗し、県内外からの徳島市の阿波踊り見物のためのアクセスが格段に向上したのである[37]。

こうした交通網の拡充・整備というハード面のみならず、ソフト面での観光客の誘引手法においても著しい発展がみられた。とくに大阪商船や摂陽商船は瀬戸内海航路の船客開拓に力を入れて数多くのリーフレットを発行し、そのなかで徳島県の名所・旧跡に関しても、鳴門の渦潮や大歩危、祖谷（いや）などの観光地が宣伝・紹介された[38]。そこには盆踊りや渦潮の写真にその魅力を伝えるコピーが添えられ、京阪神からの旅客を徳島に誘ったのである。

さらに、大正末には日本旅行文化協会（1926年に日本旅行協会と改称）編集の『旅』や『旅と伝説』（三元社）といった旅行専門雑誌が発刊され、旅行ブームを牽引した[39]。『旅』（1931年8月号）には、「鳥追い姿も優し　徳島名物盆踊り　活発で、スポーツ的　優美で、洒落な踊」というタイトルの記事が掲載され、踊りの起源として「築城説」や阪神方面からの船便時刻、料金などが紹介された。また、昭和に入り鉄道省は「旅行ブーム」を背景に団体客の獲得に向け各地で「旅行会」を組織した[40]。そうした動きを受けて団体旅行が増加し、阿波踊り見物ツアーも組織された。

『旅』（1933年12月号）は、日本旅行倶楽部大阪支部が主催した「鳴門観潮と阿波盆踊鑑賞の会」という団体旅行記が掲載している。9月3日早朝、「『旅』の文字を図案化した揃ひの浴衣に揃ひの手拭に身をかため」た60人が大阪天保山から摂陽商船の汽船で出航し、淡路島・鳴門観光を経て、丁度阿波踊りが行われている徳島市内へ入った。そこで「徳島郷土芸術の権威者」であった林鼓浪から阿波踊りの起源・沿革と、阿波踊りは「心の躍動」であるとの話に耳を傾けた。宴会後には、「街路へ飛び出し、市役所前の審判場前で土地の連中に伍して踊り狂ふ勇猛さ、成程今聞いたばかりの心の躍動が遺憾なく発揮されて、審判員も顔負けの形で数旒の優勝旗や大渋団扇が、外来者と云ふハンデキヤツプで、吾等一行の手に授与された」のである。

また、阿波踊りは当時最新のメディアであるラジオをはじめ、映画、レコードを通して全国に紹介されることで、全国的な認知度を上げて観光化が促進された点も見逃せない。ラジオについてみると、1927年8月に『徳島毎日新聞』が大阪放送局に市内花街の「徳島盆踊選手」

を派遣し、放送に出演させている。1933年7月に開局したJOXK徳島放送局は、9月4日に阿波踊りの実況放送を行ない、これ以降毎年のように全国放送が行われた。また、芸妓のお鯉（多田小餘綾）が吹き込んだ「徳島盆踊歌」（よしこの）が1931年7月にコロムビアレコードから発売された。映画では、徳島日日新報社が1930年マキノプロダクションを招待し、「阿波の踊子」が撮影されたが、同じタイトルの東宝映画が1941年に長谷川一夫主演で製作されるなど、マス・メディアでの露出が相次いだ[41]。

2.5　観光化による盆踊りの変容

それでは、盆踊りの観光資源化は伝統的な宗教行事である踊りにどのような変容をもたらせたのだろうか。まず前述のように、観光客らに対して「見せる踊り」としての性格を強めた。服装も揃いの浴衣が多くなり、演舞場での踊り子を表彰することを通して、「正調」を外れた踊りの排除が進められた。

とくに、1928年11月に挙行された天皇の即位を祝う「御大典記念奉祝踊り」は、開催日も長く大いに盛り上がったが、そのなかに「盆踊りが十分踊れない学生等がハーモニカとタンバリンを奏しながら踊った」ことが同世代の若者らに刺激を与え、ダンスのステップを真似たり、ダンダラぱっち姿や法被姿などで踊る自由奔放な踊りが出現した。そうした踊りを新聞は「ジャズ化」と呼び非難した[42]。1932年3月15日に、徳島市役所で開催された「阿波の名勝、旧跡を県外に宣伝する方法」について協議する座談会において、出席者から「ジャズ化」した踊りに対して、「誠に嘆かはしい、かかることでは県外観光客を誘致することは困難」であり、「各方面一致協力して昔の如き阿波独特の古典優雅な踊りに還元せしめたい」、「夏の盆踊り審査の際には」、ジャズ風の踊りには「優勝旗等を授与してはならぬ」との厳しい意見が続出したのである[43]。

また、『徳島毎日新聞』（1932年8月11日）は、「踊りのジャズ化を排す」と題する論評を掲載し、「ジャズ化」した踊りは「踊りで最も大切な美的普遍性」と「優美性」に欠けていると批判した。「見せる踊り」として統一された美しさや「洗練さ」「スマートさ」を求めていた徳島観光協会は、こうした意見を受けて、1936年に協会の踊り審査場で観光協会長の優勝カップを授与する際の審査基準を厳格化することを通して「ジャズ化」した踊りの一掃を企図した[44]。

しかし、表2のように、本来的に「阿波踊り」は絶えず時代の流行や変化に即応しながら、さまざまな要素を取り入れ、ダイナミックに変化を遂げてきた踊りである。そうした特質からみて、「正調」とすべき基準を定めることは基本的に困難であり、踊りの特質とは相容れない。しかし、観光化を推進するなかで、「正調」論が新聞紙上や観光事業関係者の各種協議会の席上で声高に主張され始めたのである[45]。また、この「正調」の踊りが喧伝され推進された過程において、阿波踊りのルーツに関する「伝説」や「物語」が創出されている。徳島観光協会から1935年に刊行された『徳島案内』は、次のように阿波踊りを紹介している。

「阿波踊　天正十五年七月、眉山城（今の徳島公園）の竣工を祝する為め時の城主逢庵公が特に無礼講を許したに初まり、爾来毎年旧七月十四、十五、十六の三日間全市は狂踏乱舞の巷と化し『よしこの』狂想曲に

夜を明かして踊抜き、阿波の気狂踊とまで云はれて居ります」[46]

このような「築城説」が、十分な学術的検討を欠いたまま流布され、現在でも阿波踊りの「よしこの」では「阿波の殿様蜂須賀公が今に残せし阿波踊り」と唱われている。もちろん、この「築城説」に対しては、すでに当時から郷土史家から「俗説」との批判があった[47]。学術的歴史学的な科学的検証を欠落させてはいるが、盆踊りに新たな伝説や物語が「創作」され、「イメージ操作」が行われることによって、「観光資源」としての「価値」が付与されたと考えることはできよう。その結果、本来的に盆踊りが有していた宗教性は一層希薄化され、「遊芸化」がさらに進んだのである。

こうして阿波踊りの観光資源化への取り組みが進むなか、その成果が出始めて、県外観光客は漸次増加した。しかしながら、観光客から「正調」路線の取り組みが、必ずしも好意的に評価されたわけではなかった。『大阪朝日新聞　徳島版』(1933年9月6日)は「乱舞の幕閉づ」「踊態も唄も単調が欠点と　観光客が頂門の一針」との見出しを付け、商工会議所が市役所前に設けた審査場で観覧した観光客へのインタビュー記事を掲載している。

「市役所の審査場で長時間見させられたのには閉口しました、はじめの十組は面白かつたが、三十組四十組と踊つて前を通つて行くのが殆ど一定した踊態だつた、唄も同じ調子の囃なので終りは退屈して了つた」「まあ将来はもつと唄を唄ふにも踊りを踊るにも形に囚はれないやうにして踊れば見るものも退屈しないこと丶思ふ」

観光協会、商工会議所は「正調」阿波踊りを主導し、「伝統的な盆踊りがもつ猥雑さや無秩序な民衆のエネルギーは整序」[48]され、観光資源としてスマートで秩序正しい「見せる踊り」となることを求めた。しかしながら、これまでの奔放で自由な盆踊りの性格・芸態を大きく変容させ、「型」に入れてしまった結果、審査場(演舞場)では画一化された踊りが延々と続くことによって、観光客をかえって「退屈」させてしまったのである。

3. 戦後における阿波踊りの発展と伝播

3.1　戦後の復活と演舞場運営

第2次世界大戦中、中断を余儀なくされていた阿波踊りは、敗戦後の1946年には早くも復活する。GHQ（連合国軍総司令部）の占領下、徳島県警察部保安課は占領軍と折衝し、踊りの許可を得る。同年、現在の「有名連」である娯茶平(ごじゃへい)連、天水(てんすい)連などが結成され、食糧不足など社会情勢の不安定さが残るなかではあったが、徳島市では市民の踊りが復活することになった[49]。

同年の踊りの運営主体となったのは徳島県国際親善協会であった。翌47年には徳島商工会議所、徳島市商店街連盟および徳島放送局が共催する。その後49年には商工会議所、県観光

協会、徳島新聞社をはじめ元町商店連盟など商店街が主催者となり、市商店連盟および県、市、四国鉄道局、日本交通公社が後援した。また、1951年まで演舞場は市内中心部だけでなく周辺部数か所にも点在していたが、そうした場所では踊り子を呼び込むのが難しく、かつ地元商店街にとっても十分な経済効果が期待できなかったため漸次廃止された。また、中心部の商店街にとっても踊り期間中は飲食関連以外の売り上げにはつながらず、むしろ「迷惑」なものとしての認識が強まり、演舞場設置の主体から脱落していく(50)。

さらに、演舞場（桟敷）が設置されたために、気安く踊ることができず、市民の参加者が減少した状況を受けて、1951年に徳島新聞社社長前川静夫は新聞紙上で演舞場の廃止を提案し、1953、54年の2年間全廃された。この演舞の廃止措置は見物人からは「どこにいても見える」と好評を得たが、踊り子たちからは、「審査場がないと力を入れて踊る場所、つまりヤマがない」などの不満が噴出したため、1955年には演舞場が復活した(51)。

演舞場廃止に不満を漏らした踊り子たちには、すでに阿波踊り＝「見せる踊り」との概念が刷り込まれていたといえよう。この演舞場の存在についてはメディアでも意見が分かれたが、踊る場を街全体の「エリア」から「スポット」へと変化させ、「視覚重視の観光資源」へと変容させるのに大きな役割を果たしてきたとの評価もある(52)。

なお、演舞場の運営については、紆余曲折を経て1972年に一本化されることになった。徳島市観光協会と徳島新聞社が共催し、阿波踊り実行委員会が主管として演舞場を設営し、阿波踊り全体の運営を行うという体制が形成された（この体制は2017年まで続き、2018年から新体制に変更され、同年の徳島市阿波踊りの混乱を招き観客数の落ち込みをもたらせた）。なお、この体制の構築によって実質上の主催者となった徳島新聞社は、新聞紙上で踊り期間を中心に阿波踊りの記事や協賛広告を大量に掲載し、「他地域の新聞社が地元の祭りを取り上げる場合と比較して非常に多」くの情報を流すことで、高度成長期以降の阿波踊りのあり方に大きな影響力を持った(53)。

ところで、1950年代には阿波踊りの「観光資源」としての価値を高めるために、県、市、観光協会などが中心となり県外や海外への宣伝活動を行った。その嚆矢は、1954年から毎年京阪神に派遣された「キャラバン隊」であるが、全国に向けて最も大きな観光宣伝効果を発揮したのは、NHK徳島放送局をはじめ地元民放の四国放送や大阪の民放局などによるテレビ放映であったといえよう。テレビは、ダイナミックな踊りやリズミカルで浮き立つ囃子など阿波踊りの魅力を、映像と音声で迫力あるかたちで茶の間に伝えた(54)。なお、一方で、大衆娯楽の中心が映画さらにテレビに移行するなかで、徳島を代表するもう一つの芸能である人形浄瑠璃の上演は急速に減少していった。

こうして、阿波踊りは観光宣伝の試みやマスメディアへの露出が増えるにつれ、観光客数を大きく伸びていき、4日間で見物人が100万人を越える国内最大規模のイベントへと成長して、日本を代表する祭りとなっていった。それはさらに「見せる踊り」への傾斜を加速させた。とくに、踊りの形態に大きな変化をもたらせたのが、1964年から始まる「前夜祭」と1966年からの「選抜阿波踊り大会」の開催であった。「鳴門の渦潮ぐらいしか見るものがなく、時間を持てあまして」いた観光客を対象に、昼間屋内で有名連の洗練された踊りを見せようと「選

抜阿波踊り」が企画された。舞台での踊りは、照明効果やフォーメーション、キメのポーズ、動と静の動きに技巧を凝らすなど、さまざまな演出が加えられた。その影響で全体的に有名連の踊りは、より集団的なパフォーマンスを高め、連としての個性を追究するものへと変化していった[55]。

こうした舞台上演によるやや過剰ともいえる演出や有料の演舞場だけで力を入れて踊る「見せる踊り」、「ショー化」の流れに対して、市民の厳しい阿波踊り批判が噴出し始めた[56]。そうした批判を受けて、実行委員会は「参加する踊り」＝「踊る阿呆」の復活作業を始めた。その成果が1977年からスタートする「にわか連」であり、観光客や見物人が自由に飛び込みで参加し、有名連の踊り子や鳴り物が応援に入り、演舞場に踊り込む形が生まれた。また、無料で入場できる演舞場が市内数カ所に設営され、さらに「街角踊り」「輪踊り」などが各所で行なわれ、交通規制された市内中心部のエリア全域が巨大な踊り空間となることで、観光客に新たな魅力を提供するようになってきている。

ここで徳島市の阿波踊りが規模を拡大していったバブル期の1981年の実態を『徳島新聞』(1981年8月16日)でみておこう。同年は8月12日～15日の4日間の日程で行われたが、期間中の人出は127万人であった。前年より数万人の減少となり、おりから神戸市で開催中のポートピアが影響したとの関係者の声を載せている。演舞場の運営収入は、表3のようになっているが、演舞場の座席券や広告収入合計8,665万円に対して、設営運営費の支出が9,300万円にのぼり、600万円ほどの赤字を計上した。この赤字の一部は選抜大会(昼の公演)の収入で補填されたが、損金は翌年に繰り越された。阿波踊りは観光資源として大きな経済波及効果を持っていたはずだが、運営自体としては、利益を出していなかった(このことが徳島市観光協会〔2017年に清算〕における累積赤字問題の責任の所在を巡る争点となった)。

なお、旅館、ホテルの宿泊料金には「踊り料金」が設定され、日本観光旅館加盟業者が公

表3. 阿波踊り運営の収支

演舞場収支　（単位：万円）

収入		支出	
座席券 (一般、97,217人、団体3,712人)	4,991	有料演舞場設営運営費	7,383
広告	2,521	無料演舞場設営運営費	1,450
県・市補助	1,050	余剰返済金	467
雑収入	103		
計	8,665	計	9,300

選抜大会収支

収入		支出	
入場料 (18回公演,19,220人)	1,121	出演料その他	415
雑収入	18	会場費・装飾費	320
		人件費・諸費	54
計	1,139	計	789

(出所)『徳島新聞』1981年10月2日、阿波踊り実行委員会発表

表した「観光シーズン中の最高料金」の範囲を守ったのは 7 業者に過ぎず、19 業者が 1,200 円～ 5,000 円程高い値段を設定し、朝夕食附きを原則として 5,500 円～ 1 万 5 千円の食事代金や税金を上乗せしていたと批判的な報道がなされている。徳島では阿波踊りの 4 日間に観光客が集中するため、需給の関係上宿泊費の価格が一定程度上昇するのはやむを得ないものであったが、このような強引な「踊り料金」の設定や宿泊場所の不足は、観光客には不満を抱かせ、明石海峡大橋が完成し本州と陸路で繋がった後は、日帰り観光客を増大させることになった。

3.2　関東への伝播と定着

ところで徳島の地域芸能の観光資源化を通して拡大・発展を遂げてきた阿波踊りは、1970 年代を中心に全国各地へ伝播している。首都圏での阿波踊りの嚆矢は東京・高円寺であった。1957 年に東京高円寺商店街の青年部が発足記念として、「高円寺ばか踊り」という名称でスタートした。その後、60 ～ 70 年代には東京都内各地域および埼玉、神奈川など関東 50 か所余りに伝播・拡大した（表 4）。阿波踊りを導入した多くの街が期待したのが「商店街振興」や「地域活性化」であり、そこに賑わいをつくり出すことであった。「東京高円寺阿波おどり」は半世紀を経て、3 日間で 1 万人の踊り子と見物客 100 万人以上を集める巨大な祭りに成長していった[(57)]。

阿波踊りは、これまでみたように、さまざまな楽器や衣裳や多様な芸能の要素を取り入れて絶えず変化を遂げてきた。その特質と魅力は、一言で言えば自由自在な踊りそのものにある。2 拍子の単純なリズム、簡単な振り付けを連続することで「舞踏表現」が成立しており、老若男女が参加しやすい。踊りの単純さと急速な速度で踊ることで「無我の境地」になれる[(58)]。また、バリエーションの豊かさや踊り子の技能が発揮される柔軟で高い可変性を持ち、それゆえに「極める」のが難しいという奥深さもあり、踊りに魅せられるとのめり込む。なかでも早いテンポと浮き立つような軽快なリズムは、都市住民の感性にもマッチしている。また、盆踊りでありながら輪踊りでなく前進する行進型として発展してきたため、広場を持たない都市の商店街の道で踊れることで商店会（街）によってイベントの主役として選択された。「伝統性の強い民衆的な踊りのなかで、最も現代的な祝祭性に合致した形式をもつものの一つ」[(59)]と評価され、80 年代には東日本を中心にして約 80 か所に拡大した。

しかし、1990 年代以降、阿波踊りの全国的なひろがりは足踏み状態が続く。その要因の一つには、1980 年代以降に深刻化する各地商店街の衰退がある。また、踊りに参加する若者にとっては「踊りそのもの」が目的化してきており、「連」の構成メンバーさえも「脱地域」「脱地縁」意識になっているという[(60)]。そうしたなかで、阿波踊りに対抗して隣県高知で生まれた「よさこい」踊りが、北海道のソーラン節と合体するや、より自由度の高い形式によって若者の心を掴み、急速に全国に拡大し、参加者・開催場所数で阿波踊りを圧倒的に凌駕する現状となっている。

表 4.　東京都内の主な阿波踊り（2014 年実施分）

名称	場所	開始年	主催者	開催日	連数（人数）
東京高円寺阿波踊り	杉並区	1957	東京高円寺阿波おどり実行委員会 NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会	8.23-24	158 （10,000）
中目黒夏祭り阿波踊り	目黒区	1965	中目黒夏まつり実行委員会	8.2	24 （1,000）
下北沢一番街（名物）阿波踊り	世田谷区	1966	商店街振興組合	8.　9-10	12
三鷹阿波踊り	三鷹市	1968	三鷹阿波踊り振興会	8.30-31	30
板橋区民まつり・阿波おどり	板橋区	1970	板橋区・板橋区観光協会	10.14	13 （600）
初台阿波おどり	渋谷区	1970	初台商盛会	9.22-23	20
東京大塚阿波踊り	豊島区	1971	商店街	8.23	17
神楽坂まつり・阿波おどり大会	新宿区	1972	神楽坂通り商店会他	7.26-27	20
糀谷阿波踊り	大田区	1975	糀谷商店街	8.1-2	11
経堂まつり	世田谷区	1975	経堂農大通り商店街振興組合	7.19-20	9
中村橋阿波踊り	練馬区	1976	サンツ中村橋商店街振興組合	9.6-7	12
三茶夏祭り「阿波踊り大会」	世田谷区	1978	三軒茶屋栄通り商店	8.31	7
久米川阿波踊り	東村山市	1979	久米川中央通り商店会	8.30	8
都立かせい阿波踊り	中野区	1979	都立家政商店街振興組合	7.27	9
小金井阿波踊り	武蔵小金井市	1979	小金井阿波おどり振興協議会	7.26-27	28
品川納涼祭	品川区	1979	二葉中央商店会	8.2-3	2
堀切かつしか菖蒲まつり	葛飾区	1980	葛飾菖蒲まつり実行委員会	6.8	16
成増阿波踊り	板橋区	1984	成増阿波おどり大会実行委員会	8.7	15 （650）
おらほ仙川まつり	調布市	1988	仙川商店街協同組合	8.3	4
きたまち阿波踊り	練馬区	1993	商店街振興組合	7.25	27 （1,600）
西東京サマーフェスタ	西東京市	1995	西東京サマーフェスティバル実行委員会	7.27	2
後地（うしろじ）阿波踊り	品川区	1999	後地商店連合会	11.　3	1 （20）
踊れ西八夏まつり	八王子市	2001	西八商栄会	9.6-7	15
稲城阿波おどり大会	稲城市	2001	稲城市商店会	9.6	13
蓮根（はすね）阿波踊り	板橋区	2009	蓮根中央商店会	7.14	5
小岩阿波踊り	江戸川区	2014	小岩阿波踊り実行委員会	7.19	14
南越谷阿波踊り	埼玉県越谷市	1985	南越谷阿波踊り実行委員会、同振興会	8.22-23	78 （6,000）
徳島市阿波おどり	徳島市		徳島市観光協会・徳島新聞社	8.12-15	850 （4 日間延数）

（出所）南和秀他編『阿波踊　本。』阿波踊り魂、2006 年、松平誠『祭りのゆくえ』中央公論新社 ,2008 年
NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会編、2006 年、各実行委員会ホームページおよび聞き取り調査。

おわりに

阿波の盆踊り、阿波踊りは全面的に興行化・商品化されたわけではない。もちろん、観光資源となった阿波踊りを「観光商品」として捉えられなくはないが、歴史的には江戸期から明治末まで隆盛を誇った阿波藍業をベースとした地域経済が存立基盤となり、地域徳島の老若男女が参加し、楽しみ育ててきた伝統的な民間芸能である。しかし、われわれが見てきたように、昭和初期の観光資源化の展開過程で、宗教的要素や土着性はいとも簡単に希薄化され、消失していった。松平誠の言うように阿波踊りとは、「柔軟な創意性を前提とし、固定された伝統的な地方芸能としてではなく、つねに新しい様式を生みだすものとして、つづけられてきたもの」(61) だからである。また、訓練され洗練された踊りを見せている「有名連」は別として、基本的に阿波踊りは「見物しているうちに浮かれてきて、自分も踊ってみたい気持になり、どこの連に飛び込んでいっても踊らしてくれる開放性と融和性と協調性」も「魅力」となっている (62)。

その結果、阿波踊りはどの地域でも受け入れ可能な踊りとなった。高度経済成長以降の 1970 年代に都市化が進む全国の街に「伝播」すると、自然にそれらの地域で定着し、その街の踊りに、また踊り子たち自身の踊りとなっていった。特に、こうした地域の踊り子たちの参加意識は、踊りそのものが目的化しており、「連」の構成メンバーの脱「地域」「地縁」化も進んでいる。それは、「YOSIKONO」系の急拡大をもたらした要因でもある (63)。

このように、阿波踊りの全国への「伝播」と拡大のなかで、阿波踊りの「阿波」は、伝統的な踊りを育んだ地名を示す「固有名詞」から、一種の「記号」的なものへと転化している。それゆえ、現在の徳島の観光関係者の想いは「阿波踊りは徳島が発祥地であることを知ってもらい、ぜひ本場の踊りを見に来てもらいたい」ということになっている (64)。

徳島において、藍業が衰退後の「地域」経済の振興を目的として行政機関や商工業者が取り組んだ阿波踊りの観光資源化は、地域の盆踊りをルーツとする民間芸能である阿波踊りが、宗教性や土俗性、「地域」性を喪失させながら、その歴史的な成立・存立基盤である「地域」徳島から、離陸する道を準備したともいえよう。

年表．阿波踊りの展開

年		
1914	（大正3）	盆の踊りは第1次世界大戦勃発で中止。　11．**青島陥落祝賀踊り。**
1915	（大正4）	8.24～26　大正天皇即位で盛行。花街芸妓が多数参加。
		11.15～17　**天皇即位奉祝踊り開催**、25～27日も許可。
1916	（大正5）	初の県外遠征。歌山県商工会議所要請で紀三井寺千日参りに派遣、3日間踊る。
1917	（大正6）	5.28～30　蓬庵（蜂須賀家正）祭。　8.31～9.2　実施。
1918	（大正7）	5.19　**徳島市制30周年祝賀踊り**。盆踊りは米騒動で中止。
1919	（大正8）	4.9～11　戎神社落成、市内全域踊り放題。　8.27～29「願い人」がないものの警察黙認。
		9.17～18　国勢調査宣伝の自由踊り。
1921	（大正10）	3.20　神戸開港50周年祝賀行事に富街芸妓20人が招待され、神戸市内で踊る。
		5．富街芸妓10人が東京、大阪、神戸で10日ずつ公演。
		9.3　**東宮殿下、欧州からの帰国祝賀踊り**。
1922	（大正11）	**商工会会議所、踊りポスター作成し、阪神方面に配布**。5、6、9、10月にも踊り。
1927	（昭和2）	2．『徳島毎日』、大阪放送局に「徳島盆踊選手」を派遣、放送出演。
1928	（昭和3）	徳島商工会議所、「徳島市の産業界に活気を与える」盆踊りの観光振興事業に着手。ポスター数千枚配布。同会議所、阿波踊りの「願い主」に（36年まで）。
		10.1　**徳島市置市40周年祝賀踊り**。変装行列を許可、芸舞妓の手踊り、野外劇などで盛行。
		11．**御大典記念奉祝踊り**（11日間）。
1929	（昭和4）	8.5　**商工会議所、踊りの振興策協議。**市、鉄道・船会社、料理業組合、検番、マスコミ、警察など参加。奨励策として、ポスター2千枚、ビラ等５万枚を県外配布。審査場・賞品授与所、休憩所設置などを推進。
		8.16　「美妓数十人を自動車」に分乗させ、市内で宣伝ビラ配布。
		8．踊り期間中の高松･徳島間の汽車運賃、阿摂連絡船運賃値引き実施。
1930	（昭和5）	阪神沿線香櫨園海水浴場に富田検番の芸妓25名「美妓連」派遣、宣伝活動。
		『徳島日日新報』がマキノプロダクション招聘、踊り宣伝の時代劇「阿波の踊子」（牧野智子主演)撮影。
		9.5～9.8　不況を「追つ払」うため4日間開催。
1932	（昭和7）	芸妓お鯉さん（多田小餘綾）が「徳島盆踊歌」（よしこの）を吹込み、コロムビアレコードから発売。
1932	（昭和7）	6.25　**徳島観光協会創立**。審査場、観光客のため100ｍの特別見物席設置。サービスガール15名が湯茶接待。
		8.11　『徳島毎日』が「踊りのジャズ化を排す」の記事。
		同年、踊りの4日間に徳島鉄道利用者は4万6,702人、前年より1万人増。
1933	（昭和8）	7．**徳島放送局（JOXK）開局。**9.4　ラジオで阿波踊り中継放送。「聞く阿呆を満足させたＸＫ」（『大阪朝日』徳島高知版9.8）。
1936	（昭和11）	観光協会の審査場において採点し優秀な踊り団体に協会長カップ授与。ジャズ化排除を意図。
1937～40	（昭和12～15）	踊り中止。
1941	（昭和16）	4．東宝映画**「阿波の踊子」**ロケで踊り復活。監督マキノ正博、主演長谷川一夫、入江たか子。5月封切り。
1942	（昭和17）	8．太平洋戦争緒戦の勝利を祝い阿波踊り許可。
1943～45	（昭和18～20）	踊り中止。
1950	（昭和25）	3.26 四国巡幸中の天皇に天覧踊り。「阿波踊振興会」発足（のんき連、藤本連、娯茶平連、天水蓮）。
1951	（昭和26）	観光客受け入れのため演舞場、桟敷の導入。
		11．徳島民報社の後押しで阿呆、うきよ、ゑびす、水玉、新橋連などが参加して「阿波踊振興連盟」結成。
1953	（昭和28）	桟敷の廃止。踊り子の不満で55年に復活。
1955	（昭和30）	9．徳島市長、商工会議所会頭の斡旋で阿波踊り2団体の統合促進、**「阿波おどり振興協会」**（13連）発足。
1957	（昭和32）	8.13　**東京高円寺で「高円寺ばか踊り」**実施。1961年より徳島県人会と交流。鳴門市阿波踊り振興協会発足。
1964	（昭和39）	8．徳島市文化センターで前夜祭開催。
1966	（昭和41）	8．選抜阿波踊り大会開催、旧盆で開催の阿波踊りを、15日から18日の開催にする。
1968	（昭和43）	阿波おどり振興協会、阿波踊り連合会（5連）を吸収。
1969	（昭和44）	12.26　「徳島県阿波踊り協会」(53連）発足。会長に森田茂徳島新聞社社長が就任。
1970	（昭和45）	3．大阪万博、世界のまつりに出演。
		4．徳島市主催で「毎日おどる阿波おどり」（産業観光会館）がスタート。
1971	（昭和46）	10.20　社団法人徳島市観光協会（会長徳島市長）発足。
1972	（昭和47）	8．徳島市観光協会と徳島新聞社が主催し、阿波踊り実行委員会が主管する新体制がスタート。
1998	（平成10）	「阿波おどり保存協会」発足。明石大橋開通効果で見物客が150万人突破。
1999	（平成11）	7．阿波おどり会館オープン。
2004	（平成16）	演舞場、選抜阿波踊りの入場券が全国で購入可能に。指定席、二部の入替制を導入。

（出所）石川文彦（1998）「新聞に見る阿波踊り」（『徳島新聞』1998．6.17～8.8）、関宏(2007)「阿波踊りの“ひろがり”」阿波踊りシンポジウム企画委員会編『阿波踊り　歴史・文化・伝統　』、阿波おどり振興協会編（2005）『五十年の歩み』同協会、三原宏文編著（1976）『阿波おどり実記』私家版、『徳島日日新聞』『大阪朝日新聞』

注

（1）阿波藍の歴史についての基本的文献として、西野嘉右衛門（1971）『阿波藍沿革史』思文閣、三木輿吉郎編（1961）『阿波藍譜史話図説篇』三木産業株式会社。
（2）今谷明（1981）「瀬戸内制海権の推移と入船納帳」『兵庫北関入船納帳』中央公論美術出版、58-77 ページ。
（3）戸谷敏之（1949）『近世農業経営史論』日本評論社、を参照。
（4）神田由築（2005）「文化の大衆化」歴史学研究会･日本史研究会『日本史講座 7　近世の解体』東京大学出版会、所収。
（5）守屋毅（1985）『近世芸能興行史の研究』弘文堂、14 ページ。守屋は、近世を「興行」というメカニズムのなかで「芸能が一種の商品として機能する時代」と捉えている。
（6）徳島県史編さん委員会編（1966）『徳島県史　第 5 巻』徳島県、664 ページ。
（7）三好昭一郎（2006）『喜壽記念日本史論集　徳島城下民間藝能史論』、モウラ、同上（1996）『阿波藍史』阿波銀行。朝日新聞社徳島支局（1992）『阿波おどりの世界』朝日新聞社、95-96 ページ。
（8）徳島県立文書館（2004）『特別企画展　歴史資料に見る阿波の人形浄瑠璃』同館。
（9）久米惣七（1978）『阿波と淡路の人形芝居』教育出版センター（徳島）。徳島県郷土文化会館民俗文化財集編集委員会（1982）『阿波の人形芝居』徳島県郷土文化会館。
（10）大和武生（2012）『阿波人形浄瑠璃物語』徳島新聞社、104-107 ページ。檜瑛司（2004）「盆踊り」皆川学編『徳島県民俗芸能史』錦正社、100-107 ページ。
（11）横田冬彦氏は、「近世武家国家」では支配階級の武士が政治的身分関係、経済的生産関係を掌握し、身分制が基本骨格となすが、芸能・文化は「周縁部分」に位置し、「文化資本の配分」においては武士層が独占し得たわけでなく、広範な民衆の享受層を生んでいたとする（横田（2000）「芸能・文化の世界」『シリーズ近世の身分的周縁 2』吉川弘文館、15-17 ページ）。
（12）平井松午（1988）「北海道藍の地域的展開」浮田典良編『日本の農山漁村とその変容』大明堂、および拙稿（2007）「北海道移住と藍業の展開－興産社を中心に－」『農業史研究』41。
（13）天野雅敏（1986）『阿波藍経済史研究』吉川弘文館。同（2007）「明治期の阿波藍業の動向と地域経済」『農業史研究』41。
（14）三好昭一郎「徳島藩と阿波おどり」徳島新聞社編（1980）『阿波おどり』徳島新聞社、前掲三好（2006）。
（15）井上一（1913）『徳島案内』（私家版）。
（16）林鼓浪遺作編集委員会（1970）『林鼓浪遺作集』徳島市中央公民館、口絵解説。なお、郷土史家の林は盆踊りを「阿波踊り」と命名した人物であるといわれている。
（17）前掲井上（1913）。
（18）下川耿史（2011）『盆踊り』作品社、210-219 ページ。
（19）『徳島毎日新聞』1909（明治 42）年 8 月 31 日。
（20）前掲大和（2012）116-123 ページ。橋本今祐（2011）『明治国家の芸能政策と地域社会－近代芸能興業史の裾野から－』日本経済評論社は、1872（明治 5）年の教部省布達の「芸能取締り三か条」は、芸能を「国民教化誘導の教具とする基本方針を示していると指摘している。
（21）石川文彦「新聞に見る阿波踊り」（『徳島新聞』1998 年 6 月 17 日～ 8 月 8 日連載）。
（22）高橋晋一（2015）「阿波踊りの観光化と『企業連』の誕生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 193 集。
（23）（24）前掲石川「新聞に見る阿波踊り」。
（25）三好昭一郎、松本博、佐藤正志（1992）『徳島県の百年』山川出版社、178-188 ページ。
（26）『大阪朝日新聞徳島高知版』1928 年 8 月 22 日。
（27）『大阪朝日新聞徳島高知版』1929 年 8 月 7 日。
（28）徳島商工会議所編（1933）『昭和七年度事業成績報告書』同会議所、10-11 ページ。
（29）創立 100 周年記念事業実行委員会（1997）『徳島商工会議所百年史』同会議所、115 ページ。

(30)『大阪朝日新聞徳島版』1932 年 7 月 9 日。
(31)『大阪朝日新聞徳島版』1932 年 8 月 14 日。
(32)『大阪朝日新聞徳島版』1932 年 8 月 16 日。
(33)『大阪朝日新聞徳島版』1933 年 9 月 1 日。
(34)『大阪朝日新聞徳島版』1933 年 9 月 5 日。
(35) 木田拓也（2016）「ようこそ日本へ　日本の『自画像』としての観光ポスター」（『ようこそ日本へ　1920–30 年代のツーリズムとデザイン』東京国立近代美術館、所収。
(36) 立岡裕士（2002）「徳島の阿波踊り / 阿波踊りの徳島」『金沢大学文学部地理学報告』10。
(37) 徳島市史編さん室編（1983）『徳島市史　第 3 巻』徳島市教育委員会。
(38) 大阪商船の瀬戸内海航路については橋爪紳也（2014）『瀬戸内海モダニズム周遊』芸術新聞社、が詳しい。
(39) 森正人（2010）『昭和旅行誌　雑誌『旅』を読む』、中央公論新社、参照。
(40) 白幡洋三郎（1996）『旅行ノススメ』中央公論社、96 ページ。
(41) 関宏（2007）「阿波踊りの“ひろがり”」阿波踊りシンポジウム企画委員会編『阿波踊り　歴史・文化・伝統』第二十二回国民文化祭徳島市実行委員会事務局、所収。
(42) 前掲石川「新聞に見る阿波踊り」1998 年 8 月 8 日。
(43)『大阪朝日新聞徳島版』1932 年 3 月 17 日。
(44)『阿波踊り研究』第 6 号、59 ページ。
(45) 関口寛（2007）「昭和初期･徳島における観光産業振興と阿波踊り」『凌霄』14､四国大学。前掲､立岡（2002）。
(46) 徳島観光協会編（1935）『徳島案内』徳島観光協会。
(47) 郷土史家の笠井藍水は、「此踊の起原に就ては天正年間蜂須賀氏が徳島城を築いた時の祝宴に始まると云ふ俗説が流布されてゐるが、それは信ずるに足らぬ、得て斯る俗説が大衆の耳に入り易く正説は常に陰が薄い」（阿波名勝会編纂（1926）『徳島県新名勝案内』）と「築城説」を批判している。
(48) 前掲関口（2007）。
(49)「戦後 70 年の軌跡　新聞でひもとく阿波踊り」『徳島新聞』2015 年 8 月 3 ～ 8 日。
(50) 中村久子（1993）「新聞記事に見る戦後の阿波踊り」『徳島大学総合科学部人間科学研究』1-11。
(51) 前掲石川、「新聞に見る阿波踊り」。
(52) 中野紀和（2010）「交錯する関係・受け止める身体－空間と組織からみた阿波踊り－」谷口貢他編『民俗文化の探求』岩田書院、所収。
(53) 出口竜也（2009）「企業と祭り　阿波おどりと高知よさこい祭りを事例に」中牧弘允編『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館。
(54) 前掲関（2007）
(55) 阿波踊りサミット実行委員会（2007）『阿波踊りサミット 2006 報告書』同委員会、11 ページ。娯茶平連長岡秀昭は、舞台での阿波踊りで「我々が一番とまどったのは、上手く見せる、綺麗に見せるにはどうすればいいかということ。女踊りは、足の動きを揃えると綺麗に見えるのですが、フォーメーションを使うときにも足を揃える」「決まりが、舞台演出のためにできた」、また男踊りもかつては [自由奔放」で個性的であったが、現在は「特徴の有る踊りをする者はいません」と述べ、1965 年頃から個人より集団を優先する「現代の阿波踊り」に変わった、と回顧している。
(56) 前掲朝日新聞社徳島支局『阿波おどりの世界』194-196 ページ。
(57) NPO 法人東京高円寺阿波おどり振興協会編（2006）『踊れ高円寺　人が創り街が育む五十年』同振興協会。
(58) 三室清子（1967）「観光化された盆踊りの研究－徳島県の阿波踊りを中心として－」岡山大学教育学部『研究集録』23。
(59) 松平誠（1990）『都市祝祭の社会学』有斐閣、307 ページ。
同上（2008）『祭りのゆくえ　都市祝祭論』中央公論新社、
同上（1996）「東日本における阿波踊りの新展開」日本生活学会『生活学論叢』1。
(60) 前掲出口（2009）。

（61）前掲松平（1990）、309 ページ。
（62）富野敬邦（1962）『社会調査』明玄書房、230 ページ。
（63）前掲出口（2009）。
（64）徳島市観光課での聞き取り調査（2015 年 3 月）による。

2018 年夏に起きた阿波踊りを巡る運営主体と踊り子団体との対立・混乱は、新聞や週刊誌、テレビのワイドショーなどに取り上げられ、全国的に注目された。この問題は、本稿で考察した戦前からの観光資源化への取り組みの歴史の延長線上に必然的におきたものであると言えよう。「見せる踊り」として洗練された演舞場でのパフォーマンス（阿波おどり振興協会所属連の全メンバーによる「総踊り」）の実施を巡る対立と阿波踊り全体の運営での対立が重なって噴出したものである。

とくに、現在の徳島において阿波踊りは観光資源として県外観光客誘因に最大の役割を果たしているが、今回の対立・混乱は観光資源としての阿波踊りのイメージを部分的に毀損することになった。また阿波踊りは歴史的にみると民衆・庶民が創り出してきた踊りである。しかし、観光資源としての阿波踊りは、基本的にはそうした部分と切り離された空間で「見せる踊り」をベースに展開してきたし、またそうせざるを得ないという本質的矛盾を持っている。その矛盾は今回の当面の運営問題が解決したとしても解消しないであろう。

地域の民間芸能である盆踊り=阿波踊りが観光資源化されるなかで、本稿で考察したように阿波踊りの歴史的な成立・存立基盤である地域・徳島から剥離し、「地域」性を喪失させながら全国各地に伝播する展開を見せたが、地域内においても阿波踊りの観光資源化は、地域の人びとと踊りとの根源的な紐帯を解体、乖離を進行させるというベクトルを働かせてきたのでないか。

参考文献

阿波踊りシンポジウム企画委員会編（2007）『阿波踊り－歴史・文化・伝承－』第二十二回国民文化祭徳島実行委員会事務局
阿波おどり研究会（1993-1999）『阿波おどり研究』第 1 号～ 6 号、阿波おどり研究会
阿波おどり振興協会編（2005）『阿波おどり振興協会　五十年の歩み』同協会
「阿波木偶箱廻し」調査・伝承推進実行委員会（2014）『「阿波木偶箱廻し」調査報告書』同委員会
井内弘文（1980）『徳島経済史研究』教育出版センター（徳島）
うずき連（1997）『40 年の歩み』同連
久米惣七（1978）『阿波と淡路の人形芝居』教育出版センター（徳島）
小林勝法（2005）「観光資源としての阿波踊りの成立過程とその要因」『文教大学国際学部紀要』16-1
高橋啓（2007）『近世藩領社会の展開』渓水社
徳島県郷土文化会館民俗文化財集編集委員会（1982）『阿波の人形芝居』徳島県郷土文化会館
徳島県史編さん委員会編（1966）『徳島県史　第 5 巻』徳島県
徳島県教育委員会文化財課編（1999）『徳島の盆踊り（阿波踊り）歴史資料目録』同課
野田寿美子（2004）「阿波踊りにおける伝統性と現代性」『埼玉大学紀要』教育学部 53-1
辻本一英（2008）『阿波のでこまわし』解放出版社
三原宏文編著（1976）『阿波おどり実記』三原武雄（宏文）発行
松井悠（2005）「三鷹阿波踊りの表象」『都市民俗研究』11
三室清子（1967）「観光化された盆踊りの研究－徳島県の阿波踊りを中心として－」岡山大学教育学部『研究集録』23
吉井藤重郎 1984「阿波踊りの構造－コミュニティ・イベントの研究序説－」大阪市立大学文学部紀要『人文研究　社会学』36-11。